

### 3. 知っておきたい川の危険信号

#### 川全体を観察する

川に着いたら、川に入る前にまず高い場所から川全体を観察する。

- 危険なものは落ちていないか
- 水の量はどうか
- 流れは速くないか
- 急に深くなっていないか
- 水は濁っていないか

などをしっかり確かめるとともに、増水した痕跡などをチェックする。

もし流された木片やゴミがあるようなら注意が必要。草がなぎ倒されていたり、河原の石が黄な粉をまぶしたように汚れていたら、そこは水が流れた証拠である。植物がまったく生えていない河原と同じように雨が降ると一気に増水して浸水する場所である。こうした場所では、いざという場合を考えて、必ず避難路と道順、携帯電話が通じない場合を考えて最寄りの案内所など、連絡できる場所を確認しておくことが重要。

#### 危険な場所には近づかない

危険な場所には、必ず「水遊び危険」といったような看板が立てられている。特に堰堤の下などは水流が下向きになっていて、落ちた人はなかなか抜け出せないことがある。また、堰堤の上流側には中洲ができていることがあるが、そこは増水時にすぐに水に浸かってしまう危険な場所である。

#### こんな時は川の危険信号

日本の渓流は、ひとたび雨が降ると一気に増水し、鉄砲水となることが多い。次のような兆しが現れたら川の危険信号と判断し、すぐ避難する。

流れが急に濁り出したり、流木等が混じりだした時は、上流で木々をなぎ倒すほどの洪水が発生しているサインである。

雨が降り続けているのに水位が下がり始めた時は、上流で流れが堰き止められている可能性がある。それが決壊すると、一気に大量の水が押し寄せる。

雨がやんできているのに、水位が下がらない時は、上流ではまだ雨が降り続けていることの証拠である。

大きな岩や石がごろごろ鳴ったり、立ち木がきしんだり 裂けたりする音が聞こえるのは、渓流近くの斜面で落石 や土砂崩れが起き始めそうな時の予兆である。

#### 思いがけない所で起きる土石流

渓流で大雨に遭ってしまった時、洪水のほかに注意しなければならないのが「土石流」である。大量の土砂や石が水と混じり合って津波のように押し寄せてくる。スピードが速く、破壊力も凄まじい。危険性のある所では、1 時間に 20mm 以上の雨が降ったり、降り始めてから 100mm 以上の長雨になったら十分な注意が必要である。もし土石流に襲われたら、谷の上流側でも下流側でもなく、谷筋と直角に尾根の方へ逃げる。

#### ダムの放流に気を付ける

上流にダムや堰がある場合は、雨が降っていても放流によって川が増水することがある。そうした場所では近くに放流を知らせる看板やスピーカーや電光掲示板が必ず設置されているので、放流の知らせには十分注意する。特に大雨が予測される時には、洪水調節に備えて事前に通常より多くの放流が行われることがあるし、大雨の最中に放流制限をしていたダムも、貯水量が限界にまで達すれば放流を再開することがあるので気を付ける。



植生の痕跡のない場所は増水する



#### 急に濁りだしたり、流木などが流れ出す

あれっ！水も濁ってきたし木が流れてきたぞ



上流では

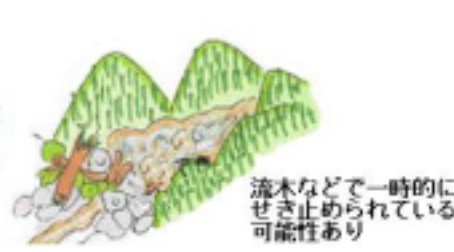


#### 雨が降っているのに水位が減りだす

何で水が減ってきたの？おかしいなあ～



上流では



### 4. 緊急事態に備えて

#### ライフ・ジャケットは必需品

万一流されるような事態が起きても、ライフ・ジャケットを着ていれば溺れる心配はない。事前に安全な場所で予行演習し、実際に浮くことを実感させておくと、いざという時にも子どもがパニックに陥ることはない。ただし、ライフ・ジャケットはサイズが合わないと脱げやすく、役に立たないので、子どもの成長を見越して大きめのものを買ったりせず、必ずサイズの合ったものを用意する。なお、流されたら仰向けになって足を下流に向けることや、ロープは救助者のいる岸とは反対側の方に背負うなどの対処法を事前にしっかり教えておくことが大切。

#### もしも子どもが流されたら

子どもが川の中に落ちてしまった時や流された時にあわてて飛び込まないようにする。衣服を着たままだと泳げる人でも溺れてしまうことがある。また、パニックになった子どもにしがみつかれて 2 人とも溺れることにもなりかねない。救助する側もされる側もまず落ち着き、冷静に判断することが大切である。流された子どもが手の届かない距離だったら、子どもの視界に入る場所から、専用のスローロープを子どもが確実につかめる位置に投げる。子どもがロープを握ったら、流れに押されて自然に岸に寄ってくるので、救助する者はその場を動かないようにする。保護者がもう 1 人いる場合は、さらに下流で待機させる。なお、救助者も必ずライフ・ジャケットを身に付けておくこと。

#### 助け上げたら

- 意識のあるなしを確認
- 水を吐かせる
- 救急センターに連絡
- 呼吸道を確認し、人工呼吸をする
- 心臓が止まっていたら、心臓マッサージを続ける
- 救急車が着いたらプロに任せる

事前に地元の消防署などが行っている講習会で、人工呼吸や心臓マッサージのやり方をマスターしておく。また、救助の際にお世話になった人がいたら、名前や住所をしっかりと聞いておいて、一切が終わった後に、報告と感謝の挨拶を忘れないようにする。

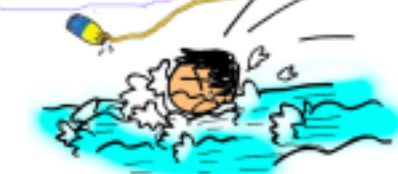
#### サバイバルスイム〔着衣水泳〕の練習をする

服を着たままだ、突然水の中に落ちてしまうと、泳げる人でもパニックになってしまうことがある。そこで、あらかじめ服を着たままだ水に入るとどうなるかを体験しておくことが大切だ。いちばん泳ぎの障害になる靴の脱ぎ方は、特に練習しておくことよい。



ライフジャケット  
川で溺れそうになった時に、これがあれば水面に浮いていられる。  
リバーシューズ  
川の中の石や岩は、コケなどで滑りやすくなっているため、足をとられないように、リバーシューズやスポーツサンダル（ビーチサンダルではない）を履く。古靴下に、古靴を利用するのも良い。

スローロープなどを投げ入れる



仰向けに !!